

# COSMOS集



「あすなる集」特選

白 い 雲

椎 名 恵 理 \* 崎 玉

東の空の向こうの白い雲 コアラのマーチを口に放れり  
友の子の宿題リストにチェックするブルーハワイの色したペンで  
九歳の宿題ずんと終わりゆく「青い」がテーマの絵日記残し  
内容はすっかり忘れた課題図書たしかにあれは哀しい話  
小学校最後の夏の課題図書『ハッピーバースデー』大抱いて読んだ

室 町 武 者

三 沢 左 右 大 阪

四条ゆくバス人だらけ右に佇つひとは室町武者かも知れず  
清水の長き茶わん坂幾千のカメラ登り来カメラ下り来  
髪のいろ熾火のごとき若人ももみぢの秋の山のにぎはひ  
ぬばたまの夜の裏道にじんと立ち冬を拒めり高き脚立は  
デジタルの時間表示は薄つべらく抓みあげなば剝がれさうなり

ジューズの色

松 井 恵 子 茨 城

どこにでも私のやうな人はゐて夕陽に背中温めてゐる

歳末の大売り出しに夕ひかる車体は集ひ語るなく待つ  
見えぬまま飲み干されゆく紙パックジュースの色を今日は怖れる  
難儀して選びたる靴面接の日に一度履きその後履かず  
0歳を預けて仕事することの淋しさがチカチカと銜照らす

米 搗 バ ッ タ

坂 井 寿 々 子 \* 東 京

やんわりとミスを諭せば部下泣きて謝る我は米搗バツタ  
同時通訳の間際に唱えるは「生麦生米生卵」なり  
クリクリのマルコメミンの少年の弟もコメ食ベオジサンに  
米屋から整体師へと転じたる人のつぶやく「儲からぬ」なり  
手の荒れて最強ステロイドも効かぬ生を変えよと我に言うごと

オモニの声

康 哲 虎 \* 兵 庫

写真を撮る音があちこち響くなり富士を横切る新幹線に  
スピードを緩めて走れのぞみ号真白き富士が晴天に見ゆ  
日曜の午後にたい焼きでも買ってオモニの声を聞きに行こうか  
目が良くなるアプリがあらばガラケーに別れを告げてスマホに替えん  
言霊の幸わう国にアメリカの基地も危険なヒコキも要らない

時 の 川 辺

塚 原 明 子 愛 知

黒く照る広き道路に黄金色の別れの大雨いちやうは降らす  
地下鉄の椅子に座りて一斉にスマホの中の誰と話すの  
習ひても幾度ならひても炉の前に座せば抜けゆく御点前の順  
精神を病みし歳月かへり見て時の川辺に立ち尽くす秋  
みちのくに歌よむ人の歌集ひらき触れるは白き粉雪の紙

銀 婚 式 宮 内 博 子 埼玉

聞きたくない話聞かずに過ごし日 聞きたい話聞こえないけふ  
原因の知れぬ病に「ストレス」と「加齢」の単語多用する医師  
吾は耳を夫は目を病み夕食の後に葉を飲むために立つ  
十一月二十二日にいまだおよばず銀婚式むかふ霜月二十一日  
快晴を己が手がらのやうにしてはしやぐ男と旅する初冬

ナナちゃん人形 樋 田 由 美\*三 重

たたまれて眠ってしまったこの心今朝は大きく広げてみよう  
淋しいな名駅の顔のナナちゃんが一時的でも撤去されるは  
しばらくはナナちゃん人形いないのかそう呟いた若者がいた  
年末は仕事が多い何故だろう空気が冷たく澄んでいるから  
現金とキャッシュレス決済は半々で どちらもあると思わないかい

「く」の字 義 原 一 郎 鹿児島

帰りしな大音声に魂消たり車庫の隅にて鳴く轡虫  
膝関節、股関節痛に重なりて座骨神経痛「く」の字で歩く  
つくづくと手に職もたず生き来たり余技のやうなる短歌を作る  
起き抜けにコップ一杯の水を呑む一杯ほどを出してから呑む  
中庭でチークを踊るレジ袋とあれは師走のそぞろ神らし

ススキさやさや 浅 海 芳 子 埼玉

やることが次々現る十二月だけ炬燵でわれ丸くなる  
高級といふヴィトンよりポケットの多き日本の鞆好きです  
家の前にローンンできて便利なりケチャップ買へりサンダル履いて

サツカーをする子らの声響く中ススキさやさや揺れる夕暮れ  
スカートをさらつとめくるビル風に慌てて鞆と手で抑へたり

サマルカンドの花嫁 山 本 辰 雄 長崎

金飾りいくつを赤き服に付けサマルカンドの花嫁は立つ  
青き服一年着ると女言ふサマルカンドの夫を亡くして  
ウルグットシルクロードのある街のやさしき顔の女刺しゆうす  
耳遠き利用者に言ふ介護師は「マンカイですな」山茶花が咲く  
コスモスの選者小言をツマにして子が送り来し焼き菓子を食べ

加西北条の羅漢 森 本 順 子\*兵 庫

園児らの別れのあいさつの声ひびきカラスも安心したのか飛びたつ  
加西北条の羅漢は指定文化財鼻が欠けたり腕なくしたり  
私ならどんな風に彫るだろう怒った顔か笑みたる顔か  
石仏は寺訪う人が好き勝手言つてすることに耳かたむける  
にしぞらにピカソが殴り書をしたよな夕焼け トラが吠えてる

古稀の青春 菊 山 正 史\*広 島

ほとんどが都会で暮らす同窓生過疎地に戻ったわれは変わり者  
帰郷して初めて漬ける梅の実は母に倣いて干し柿入れて  
右肩が深く窪んだ砥石置き父の背浮かべ鎌を研ぐ朝  
植樹して清流保つ江ノ川われら待ちおり若鮎の群れ  
若き日に叶わなかった750CCを皮ジャンで走る古稀の青春

風心地よし 榎 本 亨 子\*和歌山

「来るかい」とラインが息子より届く紅葉さなかの京都へ行かむ

膝、腰の痛み和らぎ遠出すること久しぶり風心地よし

「くろしお」の十五号車十七C今はわたしの占有席なり

紅葉の京の寺庭めぐるときそつと子の腕借りるかいだん

御主人もと味見のチリメンすすめられ苦笑す息子四十八歳

海 の 涯 大 橋 洋 美 鹿兒島

冬の日には海の涯より射し初めて炎のさまに波を光らす

スクワットけふの課題をクリアせり三重丸ぞ三回成して

流れる時報の「夕やけこやけ」聞き夫と二人で桑の実を摘む

水道の管の取り替へ工事済み不意に身巡る血の管思ふ

平成の終はるを待たずわが叔母は明治生まれの生を遂げたり

かごの 枯葉 大 野 真智子 茨城

ふるさとの袖子の香りの残る手でシャツを干したり真白きシャツを

師走の夜道路工事の光あふれ影絵のごとくひと動きをり

自転車のかごの枯葉をふりはらひ漕ぎいでてゆく師走の市に

新聞をまるめ切れあぢたしかめる研屋のあるじのこゑあたたかし

枝先にまだ青き房残りゐてトマト引き抜く手をとどめたり

青いネクタイ 泉 陽太郎\*東京

父と子の情はあるようなないような水母みたいなかすかなひかり

この踏み切りたぶん歴史には残らないいつもわたっているこの僕も

今までに減んでいった消しゴムを吊っているシャープペンシル

びつたりと閉じたスチールロッカーの隙間を出づる青いネクタイ

会社には密林よりもたくさんの罌が仕掛けられてて盛夏

恐怖という文字はインクの染みなのだどと気付いたときはすでに深秋

両手で被う 政 木 貴久子\*広島

初雪は幸せものだ「あつ雪」と誰もが見上ぐ懐かしそうに

落ち込むと言うほど寂しい訳でなくわが子のよくな猫を抱きあぐ

「寒いね」と何度も猫に声をかけ「ニャー」と言わせるいい子だお前は

どっしりと浅瀬に立てる青鷺のうしろ姿に夫をおもえり

曇天に青鷺とけ込むまでを見て両手で被う冷えたる耳を

筑波山神社 松 村 千津子 神奈川

筑波山神社に万葉歌碑ありて嬬歌かがの人らのとときめき思ふ

筑波嶺を「乳房型の山」と詠みし人ありてうべなふもみぢする峰

筑波山神社の万葉小径行く衝羽根の実の色づく傍を

「母」の字が壁に踊りて母への愛黒潮のごとし寺山修司展

核廃絶訴へる声透きとほりサーロー節子のエナジー伝はる

木洩れ日混せて 岩 田 房 子\*徳 島

真昼間の気温はなんと二十五度冬の畑に半袖、帽子

木蔭にてハーブティ飲む一人飲む風の戦ぎと木洩れ日混せて

祝いと願いとおりに見やすくてかるがる回る地球儀もらう

アメリカへ向かう移民の足どりを地球儀に辿る四五〇〇キロ

辻井伸行のラ・カンパネラ飽かず聞く紅葉となりて冬木となりて

それぞれがソリスト 斎 藤 のり子 岩 手

気紛れなダンサーのやうに舞ふ落葉わが肩に降りしばし憩へり

乾燥し身軽になりし藤の莢ますますに垂るる氷雨に濡れて

轆かれしは連合ひなるか幾度も鴉は擦り寄る車さけつつ

百名の合唱団員それぞれがソリストに化し「第九」歌へり  
今し方「第九」奏でしチェリストが八百屋に入りて林檎選りを作り

甘口のはず 相 森 野志恵 佐 賀

み棺の息子の顔は見難しと友は泣きつつわが手を握る

二時間の法話聴きたり後半は咳をこらへてうち過ぎしのみ  
向かひ家の屋根に白鷺一羽来て一〇分間もこちら見下ろす  
甘口のはずのもろみを求め来てやつぱり辛い腎病む身には  
陽だまりの庭に来てゐる赤トンボ朝冷え五度の霜月二十日

入院の日々 松 下 節 子\*愛 知

覚悟した入院準備のはずなのに苛立ちかくせず荷物にあたり  
入院の手續き終えた束の間のロビーでコーヒー無言の夫と  
夫からのメールめずらし「明日がんばれ」手術前夜の明かりも消えて  
術後の脚ベッドの縁まですりよせて深夜のコールまたもおもらし  
股関節ついに左もセラミックス身体からだになじみ吾が脚となり

釉葉褪せて 田 仲 淳 子 奈 良

「花を見にきつと来るから」葉を落とす桜大樹の瘤をなでやる  
つきまとふ動きの鈍きクローアゲハ秋の心の洞うらを覗くや

傷つきし林檎の腹をえぐりとる心の傷はかうはゆかない  
とほき日に買ひし奇抜なマグカップいま手に馴染む釉葉褪せて  
小さきミス大きな声で笑ひ合ふ耳とほき夫と目のわろきわれ

九十の手習ひ 葦 沢 陽 子 千 葉

たそがれの小路に沿ひてひとところ明かるむ見れば紅椿咲く

疵画きし南面の掛軸冬枯れの野辺に替へたり師走となりて  
おととひは夏の装ひ雨の今日は冬の装ひ地球おかし  
高校の歴史講座をテレビにて見て楽しめり九十の手習ひ  
白無地の年賀はがきに桃色の桜のシールを貼れば頌春

浮 き 雲 上 野 マツエ 福 岡

来る年は夫の十七回忌なり静かなる終の笑み忘れ得ず  
枯れてなほ姿とどむるエノコログサ列車の通過にまたも揺れ初む  
散る銀杏風に吹かれてまろびゆくこの世のしがらみ待たずかるや  
秋の空きざしに似る浮き雲の何時迄ありやしばし見つむる  
百貨店の閉店つぐる朝刊を寂しく読めりひとりの厨

極 月 八 日 古 寺 志 津 新 潟

極月八日遅き初雪あの日思ふ七十七年前晴天なりし  
年ごとに遠くなりゆく開戦の忌はしき日を語る人なし  
開戦後毎月八日の弁当は白い御飯に梅干一つ  
朝八錠昼には三錠痛み止め夕食後六錠夜中に三錠  
新しき年の願ひに加へたし坐骨神経痛消え失せ給へ

音におぼれて 永 松 たづ子\*大 分

黄の帯のとぎるもなき山路ゆくなべてを覆う葛の黄もみじ  
伐られたるけやきは樹ではなくなりて根株のめぐりに脈うつ走り根  
蜘蛛の糸風に光るを指に触れ引けばぶつと切るる感触  
フクシマの林檎の蜜濃し丸ことを皮切れぬようゆつくりとむく  
暗がりの厨の桶にマグカップ放てばかしやつと何かが破れた  
補聴器は音におぼれてただ一つ聴きたき声をつかめぬと夫

玄孫 二人 村上 朴 富山

夕食に戴く焼酎老いわれに生きる力をあたへくれたり  
十二月短歌の会のなくなりて友にもあへずさみしくす  
玄孫二人すくすく育ち健やかにわが家安泰めでたかりける  
孫に曾孫みないづこにか出でゆきて老いわれ一人飲む酒さみし  
玄孫三歳もりもり食べて三輪車を乗り廻し居るせまきところを

天皇の背 佐藤 政 勝\*岩手

平成の秋惜しむかにわが庭のいろは紅葉はしたたかに燃ゆ  
おだてられその気で唄う「大黒舞」カセットテープに生きてる親父  
ぼけつとの小銭の音が喧しく百円シヨップに道草を食う  
冬至の陽仙台平野を照らしつつ栗駒山にずぶりと沈む  
被災地に膝を交える平成の天皇の背も丸くなりたる  
冬枯れの栗の枝間にひと所熊のすみ処があらわとなれり

スノードーム 工藤 亜希子\*神奈川  
「その二集」特選

己が名の美しきを知らず強風にただ吹かれいる天津麴屋  
目に見えぬ時の巡りに人間は名をつけて呼ぶ子、丑、寅と  
湖を薄荷色の風わたるらむラトビアからの合唱団迎う  
銀色の霧いづるごとと賛美歌は大聖堂をつつみゆきたり  
スノードームここに座つて降る雪をただ眺めおり死後のわたしは

ビプリオバトル 手嶋 千 尋\*福岡

高校生ビプリオバトル県大会ブレザー、学ラン、ポニーテールたち

はきはきとSF、とつとつ『兎の眼』一冊を手には高校生たち  
本好きは文豪アニメがきつかけて「大宰治さん」という女子高生  
図書館の短歌コーナー若きらが立ち読みしている午後の静けさ  
しあわせなドンデン返しを待っているインド映画をまた観る師走

安息角 前中 映 東京

掬つてはこぼす砂糖がきらきらと安息角を保つゆふぐれ  
魚ふたつ跳ねたるのちの水紋に干涉縞といふひかりあり  
みづ色のバケツを提げて少年が過ぎたるのちの腥さかな  
形容詞ウ音便など説きながらまた泣きさうだ円谷の遺書  
ほろほると身欠き鯨の身はくづれ口中に荒き冬の海あり

自由人 水辺 あ お 静岡

出刃包丁洗ひ殺意がふと湧きぬいつたい誰を刺せばいいのか  
目に見えぬ渦に四方を囲まれて海行くごとし自由人とは  
女人らに囲まれ酒を呑むわれを見てあるわれがしづかに酔ひぬ  
枯枝の無数の雀飛び去りて窓辺の猫は髭を震はす  
ニューヨーク摩天楼街夕闇にジャズのリズムの亜紀の「舟唄」

おかしゆうなるで 石田 信 夫\*鳥取

散歩だと嘘言ひ病室出るときにベッドの母がわれを目で追ふ  
認知症の母が退所をせがみたり「ここにおったならおかしゆうなるで」  
枝ぶりは千手観音 ふるさとの（響の森）にブナ林が待つ  
東京でアジアの女性に道教えそののち我も迷子となりぬ  
女店員が両手で僕の手を包み釣銭くれぬ 数えず帰る  
人生の三分の一を頼寄せて過ぐす恋人わたしの枕

胡麻 仕事 高山 幸子\*三重

返したき言葉のみこみ見上ぐれば透きとおるまでの秋の空なり  
ばらばらん団栗落つる音しきり森を歩みて心洗わる  
莢はじけこぼれ落ちたる胡麻の実よ秋の日ざしに金に光れり  
いくたびか箕にふるいては水洗い小春の一日は胡麻仕事とす  
ピンセットに一粒ひとつぶ胡麻を選る心透きゆく夜半のひとつとき

真知子 卷き 村尾 みち子 千葉

暮れなづむ道の傾りからす瓜赤々として二つ三つ四つ  
炊事終へ背戸より出でて朧なる満月の空しばし眺めぬ  
秋深み公孫樹もみちの並ぶ坂新酒祭りの幟はためく  
枯れ庭に高砂百合はくきやかに一りん開く夕やみの中  
冬空のひと粒の雨顔に落ち真知子巻きする帰り道なり

百万ボルト 伊藤 たま子 兵庫

大観の六曲一双の「紅葉」にセキレイ一羽とびたつが見ゆ  
バラ園の大噴水の音やみて薔薇「プリンセスみちこ」香りく  
憂きことがあれこれあれど日の暮れて夕餉の仕度せよと風吹く  
気入りのブルーマウンテン入れくるる君の瞳は百万ボルト  
デパ地下の外へつらなる最後尾に並ぶ先にはハイカラ菓子が

ダム底の家 福庭 加恵子 広島

本箱に並ぶ啄木の歌集から色あせし押し花足元に散る  
初雪におほはれし野呂の山脈に冬陽のさせば朝の虹たつ

いづこより渡り来たるや水鳥は粉雪舞ひ散る湖面に浮かべり  
紅の山茶花一りん開き初む冬立つ朝のふる里の庭

ダム底に沈みたる家屋の跡みゆる水引きし石徑下り来たれば  
危さも芸 山口 芳子 佐賀

落葉が田畑も海も育てると君が守りし雑木のひと山  
「虫の歌」の琴の音響く山里の能舞台照らす十五夜の月  
惜しみつつ摘果し袋掛けたりし枇杷の実熟れてけふ口にせり  
竿灯を額、肩、腰に移し換へ踏んばり演ず秋田の男衆  
竿灯は「どっこいしよう」で空に浮き傾ぐ危さも芸のうちとぞ

窓の青空 品田 勝子 埼玉

久々に神社参りて清々し銀杏木の間に青き冬空  
山茶花のうす桃色と柿の朱冬陽に包まれ師走朔日  
残る日の今日が一番若き日と踏ん張りて磨く窓の青空  
献立ての決まれば自然に動き出す吾のスイッチは夕方に入る  
「クリスマスシュートレン」と言ふパンを食むドイツは一度行つてみたき国

舞踏会 関 康子 大阪

スーパールの棚にま光る鱒、鯖美しき目を見ひらくままに  
舞踏会はや始まりぬ風出でて公孫樹の落葉くるくるるるる  
大池に水鳥泳ぎ何処までも水脈鋭角に引き連れてゆく  
太陽は遊び疲れて天空にあまた星屑撒き散らし寝ぬ  
咲くといふ言葉ふさはし冬の夜の美星の丘の星の華やぎ  
綺麗綺麗声上ずりぬ星の群見せたき人はあの空にをり